

第4回(3月) 会議録(主な意見)

講義「ウェルビーイングの実現をめざした学校を核とした地域づくり

～コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進に向けて～

(内容)

・コミュニティスクールの意義、メリット

- ・子どもの学びを深めるだけでなく、地域課題の解決にも貢献。
- ・地域の大人が教育活動に参画することで、子どもたちの視野が広がり、深い学びが生まれる。
- ・学校運営協議会は「承認(OK)」だけでなく「協働(Let's)」の場として機能すべき。
- ・子どもの学びが深まる
- ・教職員の働き方が改善される
- ・地域の大人の心が豊かになる

・事例、実践

- ・小説の書評活動を通じて、読み方の指導後に自分の解釈を深める。
- ・グループでの話し合いや地域の大人との対話を通じて、学びを広げる。
- ・地域唯一の高校として、企業や大学(関西学院大学、北海道大学など)と連携。
- ・オンライン・対面での支援を受け、地域外の視点を取り入れる。
- ・地域住民との交流を通じて、町の活性化と高校生の成長を促進。
- ・水曜日午後にフィールドワークを実施し、地域と交流
- ・学校設定教科・科目の活用
高校では最大16単位を学校裁量で設定可能。
地域の大人との交流を授業として組み込む例も。
探究活動を通じて、社会課題に取り組む力を育成。

・地域のウェルビーイング向上

- ・地域の大人が学校を支えることで、地域全体が豊かになる。
- ・高校生が地域行事に参画することで、町の政策や祭りに新しい視点が加わる。

・地域学校協働活動の広がり

- ・地域課題の発見・解決型探究学習。
- ・高校生が地域貢献活動に主体的に関わる。
- ・不登校支援など、地域の課題にも対応。

学校運営協議会の効果的な運営

- ・委員は学校の目標や年度テーマに応じて選定。

- ・毎年テーマが変わるため、柔軟な委員構成が求められる。
- ・地元自治体が独自にコーディネーターを雇用する事例も多い。
- ・コーディネーターは学校と地域をつなぐ重要な存在。
- ・コミュニティスクール運営には、子どもの意見を反映する仕組みが不可欠。
- ・小中高・特別支援学校問わず、子どもを「当事者」として位置づけることが重要。

（委員からの主な意見）

- ・地域と学校の連携に加え、企業や諸団体との繋がり的重要性を再認識。
- ・婦人会では「交通安全母の会」として高校生の登下校見守りやマナーキャンペーンを実施。
- ・高校生との接点は限られるが、活動を通じて交流が生まれている。
- ・高校ではより広域・多彩な人材との連携が可能であることに感銘。
- ・能登地域の震災復興において、高校を拠点とした人材育成の可能性に期待。
- ・探究活動を通じて、地域・全国・世界との繋がりが生まれることを希望。
- ・地域住民が学校活動に参加することで、子供との交流が生まれ、双方に喜びがある。
- ・郷土料理や昔遊びなど、地域文化を通じた教育活動が効果的。
- ・インドからの視察団との交流も地域住民の協力で実現。
- ・今後は「大人が決める」だけでなく、「子供の声を反映した活動」が必要。
- ・高校生との連携も視野に入れた活動展開を希望。
- ・小学校では地域との連携が進んでおり、CS の効果を実感。
- ・高校との連携により、探究活動の成果を小中学校に還元する可能性を感じる。
- ・例：海岸清掃などの地域貢献活動を通じた学びの共有。

（講師からの主な意見）

- ・広島に進学校では、教育学部志望の生徒が探究活動として「昔遊び」を幼児教育に取り入れる試みを実施。
- ・地域文化を教育に取り込むプラットフォームとして CS は有効。
- ・高校生の探究活動は、行政や大学とも連携し、キャリア形成にも繋がる可能性がある。
- ・海岸清掃を通じたデータ収集・仮説構築・行政との連携など、探究の深まりが期待される。
- ・大学や行政との協働により、学びが高度化し、進路選択にも影響を与える。
- ・地域課題を教育に取り込むことで、持続可能な社会づくりに貢献。
- ・高校教育における地域連携は、CS の枠を超えた広がりを持つ。
- ・地域住民・団体・企業・行政・大学との協働が、教育の質と子供のキャリア形成に寄与。
- ・子供の声を反映した活動設計が、より実効性のある教育を生む。